

監修委員 井上靖 石森延男 更科源蔵

編集委員 加藤多一 木原直彦 西田良子 和田義雄

第十卷

北海道児童文学全集



北海道児童文学全集

第十卷

立風書房



北海道児童文学全集 第10巻

21cm



昭和五十九年三月一日初版第一刷発行

著者代表―玉川雄介

発行者―下野博

発行所―株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三―六―一八

電話東京四四七―一一九一 振替東京五―七四四九三

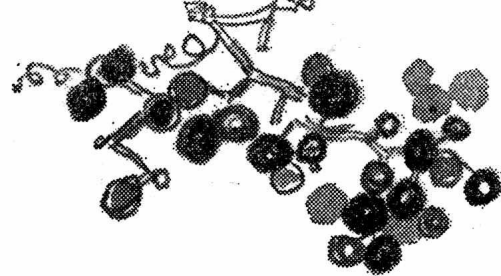
本文―信毎書籍印刷株式会社

製本所―株式会社難波製本

表紙・箱・絵印刷―株式会社廣濟堂

定価一八〇〇円

8393―50180―8909



北海道児童文学全集
第十卷 目次





青^{あお}いりんごのふるさと

コールの町^{まち}のチップ

白^{しろ}いとうげの道^{みち}

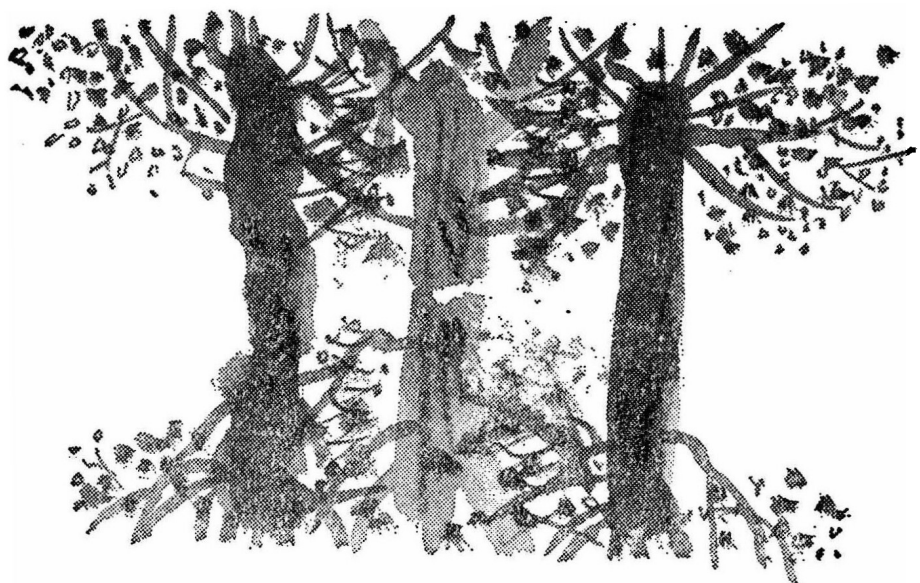
解説^{かいせつ}

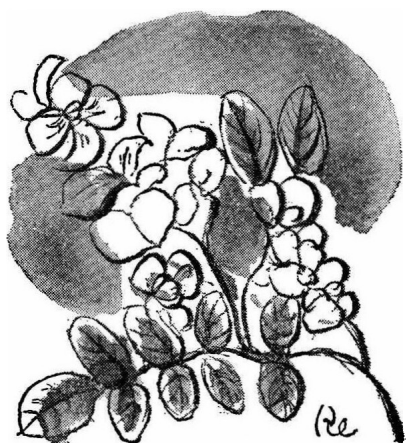
畔柳^{くろやなぎ}二美^{ふたみ}3

玉川^{たまがわ}雄介^{ゆうすけ}115

大谷^{おおや}勝義^{かつぎ}157

加藤^{かとう}多一^{たいち}199





青^{あお}
いりんの
ごのふるさと

畔柳^{くろやなぎ}二美^{ふみ}

雨傘あまがさ

山の中の発電所で育った私は、小学生のときは雨傘あまがさをもっていなかった。それは、学校まで一里の山道があるかなければならなかったので、丈夫な雨合羽あまがつばをきて帽子ぼうしをかぶって通学したからだった。

ところが、その後、町の女学校へ入学した私は、はじめて、雨傘代あまがさだいとして母にお金をもらって町へでた。その町には、母の姉あねが住んでいて、私と姉あねと二人で、その伯母おばの家から女学校へ通学することになっていた。

「あのね伯母おばさん。これで、私の雨傘あまがさを買うの。いつか一緒にみたてて頂戴あやうだいね」

伯母おばの家へつくと、私は、早速さつそく、母にもらってきた代金を伯母おばにあずけた。

すると、その翌朝よくあさ、おきてみると、外はどしゃぶりの雨であつた。

「しまった。伯母おばさん。雨傘あまがさきのう買わないで……」

私は、外を気にしながら、そわそわした。

「仕方ないねえ。傘屋かきやさんはまだ店をひらいていないだらうしさ」

伯母おばも、心配しんぱいそうに、何度なんども窓まどのほうをみながら言った。

そのころ、伯母おばは一人ひとりでその町に住んでいて、伯父おじは東京へ出張しゅつちやう中であつたが、家じゅうを探さがしても、たった一本の破れ番傘やぶがさしかないのであつた。

「これを貸してあげてもいいが……」

伯母さんはそして、首をかしげて考え込んでしまった。

「わたしが買ひものにてでられなくなるし、と、いつて、あんたに、夕食の買ひものをしてきてもらうわけにもゆかないし」

そのうちにも時間が過ぎてゆくので、私は、泣きだしそんな顔つきになった。

「伯母さん。何でもいいよ。何か、さがして貸してよ。学校おくらせてしまうもの。何か、古い傘でいいから、ないのかしら」

すると、とたんに、伯母はひざをぼんとうって、笑顔になった。

「そうだ。思ひだしたよ。あるよ、あるよ。昔のわたしの日傘があるよ」

伯母は、台所のうらの物置小屋へ走ると、柄の長いネズミ色のコウモリ傘を持ってでてきた。その形は、私が、三歳ぐらいのときに、母が持っていた傘と同じ恰好で、今では、どんな婦人でもこれをさして街を歩く姿を見かけることのないという代物であった。だが、伯母は得意満面で胸を反らした。

「ものはいいのだがね。表のほうがはげちゃって、使わなかっただけさ」

漸く、傘にありついた私は、自分の傘の恰好など全然気にもならずに、得々と、その傘をさして学校へいった。翌日から雨がさがって、天気が続いた。

「伯母さん。雨傘買ひにいこうよ」

学校から帰ると、私は、毎日のように伯母に催促をした。

「今日のはだめだよ。忙しくて、買ひものなんかにてられやしない」

その度にちょうど、いつも、夕食の仕度忙しい伯母は、こともなげに、そう言った。

そうして、一週間ほどすぎて、再び雨の朝が訪れた。

「また雨がふりだした」

外をみて、悲しそうに言う私の前へ、伯母は、にこにこ顔で、例の傘をさしだした。

「これをさしていきなよ。あんたに上げよう。それでも、ものは上等なんだからね」

私は、しぶしぶ、流行おくれの日傘を手にとった。すると、伯母は、その私の肩をぼん、とたたいてにっこり笑った。

「この町で、誰もあんたの傘をみて文句をいう人間なんていやしないんだから安心しな。ハイブツ利用って言葉を知ってるだろう。あんたは柄口な子だから、このハイブツ利用で、伯母さんを救って頂戴よ」

思いがけない伯母の言葉に、私は、目をパチクリさせた。

「じゃ、もう、私の傘を買うのやめたの」

「そうだよ。伯母さんは兎に角びんぼうなんですね。借金がたくさんあるんですね」

すると、私は、とたんに救世主になったように、うれしくなってしまった。

「うん、いいよ、いいよ。助けてあげるよ。ハイブツ利用だものね、伯母さん。いい考えだもの」

なにしろ、大人の伯母を救うという役割が、そのときの私にはすばらしいことであった。

その日いい私は、黒の雨傘が点々と続く学校への道を、たったひとりだけネズミ色の柄の長いコウモリをさして、胸を反らして通学するようになった。

一ヶ月ほどすぎた或る日、やはり、その傘をさして歩いている私に、一人のともだちが言葉をかけた。

「あなたの傘、面白い恰好だね」

「面白いでしょう。伯母さんのハイブツ利用なんだもの」

「なんだか、昔の日傘みたいね。雨傘と違うじゃないの」

「そうよ。昔の日傘よ。でも、ものは上等よ。表のほうが一寸はげているけどね」



ともだちは、苦笑すると、私の横をすりぬけるようにして通りすぎてしまった。すると、私は、急に傘が気になって、救世主のような心を持つことは、たいへんなことなのだと気がついた。私は、伯母の家へ帰ると、姉にヒソヒソと言った。

「私の傘、はずかしいよ。誰か、きつと、笑ってるに違いないもの」

姉は、私をじつとみていたが、急に泣きだしそうに顔をくしゃんとしかめた。

「笑ってるかも知れないね。でもね、伯母さんだってかわいそうだよ。一生、その傘をさすわけじゃないし、いい子だから、がまんしなさい」

姉はそして、突然、笑いはじめた。

「あんだ、いつも、勇気があるじゃないの。町の子供のように、見栄坊になつたらおしまいよ。偉い人間になれないよ」

小さいときから、人のおだてに乗り安い性分の私は、姉の言葉で再び、自分の傘に対して平静をとりもどすことができた。

すると、それから間もないある日、例の傘をさして歩いてる傍へ、破れ番傘のともだちが近よってきた。

「あなたのその傘、昔の日傘じゃない？」

「そうよ。伯母さんのハイブツ利用よ」

ともだちは、方々に穴のある自分の番傘をみあげていたが、急に真剣な表情で私のほうを向いた。

「あの、それをさしていて、誰も笑わなかった？」

「笑わなかったよ」

「私の番傘穴だらけなの。母さんの日傘、それと同じ形なんだけれど……」

「ハイブツ利用したらいいよ」

それなのに、そのともだちは、たった一度だけ、みどり色の私と同じ形の傘をさしてきたが、次の雨の日からは休校するようになってしまった。

「弱虫だなあ」

私は、内心、そう考えた。しかし、その町育ちのともだちは、小さいときから人々の生活をよく知っていて、社会人の感覚が既に芽生えていたのであった。

黒い爪

その春、新学期とともに、裁縫の教師がかわって、新しくきた先生が受けもつようになった。専門学校を卒業したばかりの先生は、たいへん若々しくて、清潔で、いつも身だしなみのいい姿で教室へあらわれた。

ある日、その先生は、Aさんの縫いものをみてやりながら声をひそめて静かに言った。

「爪がすこしよれていますね。いつも、手を洗う習慣をおつけになるといいですよ」

きわめて低い声だったのに、Aさんのすぐ隣りに坐っていた私にもそれが聞えた。Aさんの爪は、なるほど、いつみても真つ黒いあかがたまっている、手はガサガサにささくれていた。その上、彼女の髪は赤くボサボサにかわいて艶がなく、顔色もすすけたようにくすんでいた。先生が、Aさんの所から立ち去ると、彼女は、恥ずかしそうに私をみあげて、小声で言った。

「私も、いつも、爪をきれいにしたいと思っているのよ。はずかしいわ、こんなの」

「そうだったの」

彼女の意外な言葉に、私は少々おどろいてつけ加えた。

「私は、あなたが無精ぶしやうものかと思つてたわ。……でも、爪つまをきれいにするなんて、何でもないことだわ。先生のおっしゃったように、よく手を洗あらつて、爪つまを切つておけばいいんだもの」

Aさんは、なぜか、無言むげんのまま、うつむいてしまった。

それから四五日後の、日曜日の朝であつた。学校の寄宿舎きしやうしゃにいた私は、すぐ近くのチューリップ園へ花を買いに一人ひとりでかけた。毎年、春になると、そのチューリップ園にはみごとに花が咲さきそい、女学生たちの心を優やさしくなぐさめてくれるのであつた。赤や白やシボリのチューリップは、まるで春の天使のように、気高けだかく、清潔けつせつで、可憐かれんで、黒土を覆おほつて一面に咲さいていた。

四五本のチューリップを買つた私は、春のやわらかい空気を胸むねいっぱい吸すいこみながら、その花園をかけたした。

「チューリップ、買かひにきたの？」

声にふりかえると、チューリップ園の隣家りんかの、おしつぶれたような百姓家ひやくしやうやの前に、Aさんが立っていた。彼女は、手拭てふけをあねさまかぶりに頭にかぶり、モンペをはいて、にこにこ笑わらつて立っているのだった。

「あらー、Aさんの家、ここだったの」

「そうよ、ここよ。チューリップならば、家にもあるわ。あげましょか」

私は、Aさんの家の前へ近づいた。小さいチューリップが、家の前に二十本ほど咲さいている。

「でも、悪いわ。少ししかないのに。私、買かつてきたからいいわ」

「でも、私が作つくつたのよ。一本でもいいから一番好きなのを持もつてらっしゃいよ」

私は、真赤まつかな花を一本もらつた。

「どうも、ありがとう。あなたが作つくつたんだもの、とくべつ、うれしいわ」

すると、Aさんは、急に、自分の家をふりかえってから、急ぎこむように早口で言った。

「一寸ちよつとでいいから、私の家、みていってよ。なんにもないのよ。なにもないけど、あなた、私の家ちよつとを、一寸、みて頂戴ちやうだい」

彼女にさそわれるまま、私は、Aさんのあとから暗い土間へ入っていった。

なるほど、土間の向うには、すすけた小さい室へやが一つあるだけで、家のなかには道具らしいものも見当らないのだ。しかし、その室へやのつきあたりには、白鬚とろかげのおじいさんが一人、うすい布団ふとんに包つつまって寝ているのであった。

「まあ。ご病人？」

「そうなの。おじいさんなの。中気よ」

私は、暗く、ひいやりとするすすけた家を、ぐるぐるみまわして小声できいた。

「お父さんや、お母さんは」

「あらあ」

Aさんは、あぎれた、という顔つきで、まじまじと、私をみつめた。

「あなた、私のこと知らなかったの、私には両親りやうしんいないのよ。死んだのよ。おじいさんと二人ふたりきり」

「まあー、そうだったの。……知らなかった」

四年ちかくも、同じクラスでいながら、私は、Aさんの家庭のことは全然ぜんぜん、耳にしたこともないのであった。

私は、申しわけなくて、思わず、頬ほおをかたく、ひきしめた。

「それでおじいさんがご病氣はまならば……あなた、どうしているの」

Aさんは、学校ではみせたこともないような、力強いまなざしで、私をきつとみつめた。

「去年までは、おじいさんと二人ふたりで畑作はたかりをしたわ。今年ことしからは、私が、一人ひとりするの」

「……………」

私は、Aさんの、ささくれた小さい手や、すすけて色つやのない顔を、そっと伺った。

「大丈夫よ私、畑おこしは馬をたのむもの。それに……おじいさんも、このごろ暖かくなったので楽だわ。冬のあいだじゅうは、とっても私、苦労したわ」

布団のおじいさんが、ごほん、ごほんと咳をした。すると、彼女は、おじいさんのそばへかけよって、肩をさすったり、水をのませたり、かいがいしく立ち働いた。

「あの、私、また、くるわ、お忙しいでしょう」

すると、Aさんは、土間へ飛びおりてきて、私の肩をおさえつけた。

「もう少し、もう少しいてよ。私、仕事しながら話すわ、それならば、いいでしょう」

Aさんは腰をかがめると、土間のすみのタキ木を、ぼんぼん折りだした。

「私も、手伝うね」

山の中の発電所で育った私は、タキ木おりなどは、平気なのだ。

「いいよ、いいよ。手がきたなくなるから」

タキ木を、ぼんぼん折りながら、彼女は、何かを思ひだしたように、一人で笑いだした。

「今度きた裁縫の先生ね。いい先生だけど、……気が、つきすぎるね」

Aさんは、口をぐつとゆがめて、私をみあげた。

「ねえ、そう思うでしょう。私だって、爪をきれいにしたいわ。手を洗う習慣をつけたいわ。清潔にしたいわ」

「……………」

「おじいさんの身体、とっても、このごろ、よごれているのよ。私、気になって、しかたがないの。でも……せつけんがない、という家だって、あるのよ」

「……………」

タキ木折りをすませた彼女は、はだしになると、クワをかついで、私の方をみた。

「私、畑へ行くわ、歩きながら、話そうよ」

クワをかついだ彼女と私は、朝陽のキラキラ輝く道へでた。私は、かかえているチューリップが、何故か、彼女のクワに対して恥ずかしくて仕方がなかった。

「私ね、それでも、学校の月謝だけは、卒業までの分、持つてるのよ。どうしても、どんなことがあっても、学校だけはでようと思ってるの」

彼女は、同級生であるが、私より二つ年長であった。しかし、今は、私は、どんなに首をひねって考えてみても、Aさんは、私より十歳も年上に思えるのだった。

「Aさんは偉いのね。私、爪のこと言って、ごめんなさい」

「清潔は確かにいいわ。でも……」

Aさんは、淋しそうに笑った。翌日、Aさんに、私は半分のせっけんをそつと手渡した。

その後、私は、不潔な人をみる度に、必ずAさんを思いだした。

眞実

私が、町の女学校へ入ってまもない或る日、伯母が、私にそつときいた。

「どうだい。町の女学校は。少しは、なれたかね」

「そりゃあ、少しは、なれたよ」

「ともだちは、できたかい」

私は、その町から汽車で四時間ほどはなれた村の、更に山の中の発電所で育ったために、この町の女学校には一人のともだちもいなかった。

「まだ、できないね、でも、もうすぐできるよ。隣の机の寺本さんは、時々話をしてくれるよ」

「ふーん。そうかい。ところで、あんたの組に、黒川さんという子はいないかね」

「さあ、いるかどうかわかんないから、一寸まってね」

私はそこで、毎時間、先生が出席をしらべるために読みあげる名簿の名前を思いうかべた。

「阿部さん。赤石さん。姉崎さん。伊藤さん。……池上さん。……黒川さん……あったよ。おばさん、あったよ」

奇妙な顔で、私が丸暗記の名前を次々に言う口もとをみつめていた伯母は、目をパチパチさせて笑いだした。

「なんだい、この子は。自分の組の人の名前を思いだすのに、何だって、ペラペラ、そんなにたくさん言わなきゃならないのさ」

「だって、こうしなないと思いだせないんだもの。私ね、三日で、みんなの名前だけはおぼえてしまったよ。先生が、毎時間、呼ぶんだもの。そのかわり、人の顔は、まだ、よくおぼえていないよ」

「ふーん。田舎ものは、変なところをさきにおぼえるんだね。伯母さんだったら、人さんの顔は知っているが、時々、名前の方を忘れちゃってさ、とんでもないこと言う時あるが、そんなふうに名簿を作っておけば忘れなくていいね」

だが、次の瞬間、伯母は、急に生真面目な表情にかえると、私をじっとみた。

「黒川さんは、あの通り、弱々しい子で、それに、おとなしい子だから、あんた、ともだちになりなさいね。黒